ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　そして夜。俺は一人寂しく台所に立っていた。

　夜食はオムレツにしようと思い、中に入れる具としてピーマンやら人参やらを切っていた時だ。ふと気になって時計を見ると、もう九時を過ぎていた。

　どうやら会談は、思いの外、時間がかかっているらしい。五人が『トラース』に向かったのが六時頃だったから、なんと三時間以上も掛かっていることになる。会談の護衛なんて初めてのことだからよくは知らないが、このくらいかかるものなのだろうか。

　それとも、何かトラブルが……？　考え過ぎかだろうか。

　いや、気を揉むのはやめよう。精神に悪い。何があったところで、俺がどうこうできる事ではないのだ。

「……そう言えば、こんな長い時間、一人でここにいるのって初めてだよな？」

　野菜を切る手を止めて、俺は周囲を見回す。空気が冷たい。あいつらと会話なんてほとんどしなかった俺でさえ、何だか物寂しいと感じたほどだ。

　テレビでも付けよう。

　ただ淡々と包丁を動かす音しかしないのが無性に気になりはじめて、俺は普段はあまり見ないテレビをスイッチを入れる。

　それ故だろうか。

　一体どんな番組にすればいいのか分からず、適当にチャンネルを回していく。ドキュメンタリーだのお笑いだのバラエティだの、色々と気になったものはあったが、ふとアニメが見えて、手が止まる。

　いや、それがただのアニメだったら特に何も思うことなくチャンネルを変えていたのだろうが、この間日ノ下の家で読んだライトノベルのアニメだと分かれば話は別だ。

　あれは意外と面白かった。国語の教科書に載っているような話が好きな俺ではあるが、ああいうのも食わず嫌いにならず読んでみるといいのかもしれない。

「……ああ、そう言えば」

　テレビを見ながら、作業を再開する俺。刃物を使いながらよそ見をするとか危険極まりないのだろうが、あのまま続ける方が返って危ないだろう。

　ヒロインの一人が、とある誤解から喧嘩した旧友と仲直りするシーンで、俺は思う。

　なんであいつは、『闘悟』という名前を変えたのだろう。

　今までの俺では、疑問にすら思わなかったこと。それが、今の俺には不思議で堪らないものになっていた。

「……あれ？」

　ふと、記憶に何かが引っかかる感じがした。

　あまりにもぼんやりしすぎていて、気がついたことは奇跡にも思える、そんなレベルだ。

だが一度気がついてしまうと、無性に気になった。

「……あいつは、何を言った？　何を叫んでいた？」

　脳内に再生される声は、闘悟――今は何と呼ばれているか知らないから、便宜上こう呼ぶより他ない――のものでは無く、あいつの仲間と思われる……

「……『何と呼ばれているか』？　……ああっ！」

　いや、違う。闘悟が今何て呼ばれているのか、俺は知っているはずだ。

　だって、俺はそいつの声を、闘悟の仲間の声を、俺が最後に『トラース』に行って、あいつと戦って倒れた後に、俺は確かに闘悟の仲間があいつの名前を呼ぶのを聞いたんだから。

「そうだ……あの女は何て叫んでいた？」

　声は女性のものだった。

　だんだんと、鮮明になっていくその声。言葉。それは確か――

『トーゴ！　大丈夫っ？』

「……『トーゴ』？」

　背中が、ゾクッとした。

　違う。『トーゴ』じゃない。だって、これはあくまでも音声だ。

　これを、文字にする。否。漢字に直す。俺が思いつくのは、この漢字しかない。

『闘悟』

「あれ？　いや……でも、そんなはずが……だってあいつは、名前を変えたはずで……まさか漢字だけ変えて読みは同じとか？　いや、それじゃあ改名する意味が……ってことは……」

　そもそも、改名なんてしていなかった？

「なら何で――いっ！」

　不意に、指先に鋭い痛みが走る。

　……あ。

　どうやら、考えることに集中しすぎて、包丁を使っていたことをわすれていたようだ……なんてことに気がついた時にはもう、俺は見てしまっていた。

　反射。異常を感じた場所に、つい目を落としてしまったのだ。

　――指先から流れる、たった少量の、それでいて鮮明な、赤い血を。

　まるで巨大な隕石でも落下してきたのか、とでも言いたくなるような巨大なクレーターの中心。見渡す限り、地面は土一色で、上空では月の代わりにクラスタがほんのりと輝いている。吹き抜ける風が、不快なまでに肌を撫で回してくるそんな場所。部屋から転送されてきた所は、そこだった。どうやら会談はここでするらしい。

　私はレイ。『ワルキューレ』の一員で、『ユニットＡ』のリーダーだ。……まあ、『ユニットＡ』なんてユニット名はデフォルトで、かねてから、もっと格好良い名前に変えたいとは思っているのだけれども。

　こんなユニット名なままなのはロランの一言が原因で、彼曰く、

『名前なんて、ただの飾りだろ？』

　ということらしい。

　勿論私たちは「いや、そんなことはない」と反論したんだけれど、ロランは聞く耳を持たなかった。

　今思えば、時期が時期だったのかもしれない。そう言えば、ロランが私たちと距離を置き始めたのは、その頃からだった。一緒のユニットになって最初の頃は、結構素直で可愛気のある子だったんだけど、人というのは驚くほど変わってしまうなぁとしみじみと思う。

　でも、それは別に悪い方向だけじゃない。家出して、そして帰ってきてから、ロランはいい方向へと進んでいると思う。昔みたいに素直に……とはいかないかもだけど、前みたいに『孤独』を貫くようなことはないはずだ。

　ロランも、私たちと少しずつだけど距離を縮めようとしてくれている。それが、リーダーとして凄く嬉しい。とは言っても傍から見れば、だいぶ空回りしているように見えるんだけど。頑張っているのは分かるけどね。まあ、それは他の二人もよく分かっているみたいだし、仲良くなるのは、そう長くはかからないだろう。

　それを一番喜んでいるのは樹葉ちゃん。本人もロランも気がついていないけど、歩く時、目を凝らさないと分からない程度にだけれど、ちょっとスキップしているから、きっと間違いない。

　これからだ。そう、これから……

　なんて思っていたのに。

　まさか、いい雰囲気になってから最初の任務で、いきなりロランがハブられるとは思わなかった。ううん。正確には、ロランが謹慎中にも関わらず任務に駆り出されるとは思わなかった。

　私はこっそりと、目の端で木藤を睨む。

　別に木藤が特別何かしたわけじゃないし、ロランが謹慎になったのは本人の問題だ。

　それでも、やっぱりあの発言はカチンときた。樹葉ちゃんは言わずもがなだけど、普段は温厚な詠ちゃんも木藤に敵意のある眼差しを向けていたくらいだ。そして、多分私も。

　癇癪を起こして家出したロランもそうだけど、こういう風に感情を表に出してしまうあたり、やっぱり私たちって子供なのだろうか。

　……いや、今はそんなこと考えない。集中集中！

「レイ。どうかしましたか？」

　心の中で一人気を引き締めていると、詠ちゃんが話しかけてきた。

　こうして立っているだけなら、純度百パーセントの女の子にしか見えない。

でも、私は知っている。他の人、それも、同じルームメイトのロランや樹葉ちゃんでさえ知らないことだけど、実は意外と頼りになる、男らしい一面もちゃんとある。

気がつけたきっかけは、一年ちょっと前。

朝練の最中、足を挫いてしまった時だ。たまたま居合わせていた詠ちゃんに、部屋まで運んでもらったのだ。……お姫様抱っこで。

よもや、あんな細くて華奢な腕で私を運べるなんて思ってもみなかった。今でも思い出すと恥ずかしくなる。当時、この斧槍を振り回すための筋力をつけるために、ご飯は結構食べていたから、それなりに体重はあったはずだ。見た目には現れなかったとは思うけど、少なくとも、同年代の子の平均は確実に超えていただろう。正直、それに関しては今も同じようなもので、周りの子たちよりも体重があるというのは、現在進行形で悩みの種だ。太っているわけではないと思うんだけど……

でも、詠ちゃんは『重い』とか『疲れた』一言も言わなかった。まあ、部屋のベッドに私を下ろした後は、肩を上下させて床に座り込んじゃったけどね。

けれど、私が『やっぱり男の子なんだな』って思うには、充分だった。

普段はナヨナヨしているイメージしか無かったし、これは多分皆も同じなんじゃないかと思う。一緒の部屋で暮らしていて、同じ学校に通っている私でさえこうなのだ。正直、同じ『ワルキューレ』のメンバーとして、少し不安に思っていたくらい。任務に参加すれば死ぬんじゃないかとヒヤヒヤものだったし、学校にいても、いじめられていないだろうかと、こっそり様子を見に行ったことも一度や二度ではない。

そんな風に思っていたから、こんな『詠』を知っているのは、きっと私だけなんだろうなって思った。

それが嬉しくて、何だか誇らしくて……どうしてか、ちょっぴり優越感もあって。

でも同時に、もっと皆にも知ってもらいたい、なんて思ったりも……ううん。少なくとも、ロランや樹葉ちゃんには知ってほしい。私が言うんじゃなくて、本人の目で、そんな『詠』の姿をしっかりと見て欲しい。

とは言ってもやっぱり不安だから、あまり男の子がやるようなことを詠ちゃんにして欲しくはないな、なんて気もして、私の心は少し複雑だ。

けど……

「ん。大丈夫だよ、詠ちん！」

　私は元気よくそう言って、詠ちゃんの背中をドンっと叩く。体が揺れてしまうあたり、やっぱり詠ちゃんだ。

　同時に、私も改めて気を引き締める。

　この気持ちをどうするのか、そこら辺について考えるのは、この任務を無事に完遂させてからだね。

「樹葉ちんも、頑張ろう！」

　樹葉ちゃんにも声をかける。やっぱりロランがいないのが気になるのか、目の奥が暗い。

　でも本人には悪いけど、ロランはいつも単独行動に近いことをしていたから、正直いてもいなくても私たちの動きはあまり変わらない。

　だから、いつも通り。いつも通りに動いてもらわなきゃ。でも、どう声をかければいいんだろう……？

　なんて少し悩んでいたら、会談の相手――『トラース・ブレイカー』がやってきたみたい。

　ここは本当に何もない場所だが、それ故に視界を妨げるものが何もない場所でもある。だから、誰がやってきて、どれくらいの人数いるのか、すぐに分かった。だから思う。

「…………」

　人数がおかしい。というより、どこかで見かけた奴が多い、というべきだろうか。

　具体的には、別の『チーム』の連中だ。しかも、見渡す限り……ほぼ全員。

「……レイちゃん、あれって？」

「お姉様。如何なさいますか？」

　樹葉ちゃんが私に、木藤がお姉様に、それぞれ話しかける。

「敵の数は……ざっと数えても三十人、ってところですね」

　詠ちゃんの言葉に、お姉様は口に手を当てて逡巡する。

「どう考えても、会談に参加しにきた様子とは思えません……肝心の『トラブレ』のメンバーは？」

「……今見えている限りでは、一人もいません」

「……ううん。詠ちん。いるよ。一人だけ」

　詠ちゃんの観測に対して、私は首を振る。

　こちらに向かってくる軍勢の中、ポツンと一人だけ離れたところに立っている奴がいる。『チーム』に所属している人間に国籍は関係なく、それ故にブロンド色の髪をした男の子がいても、あまり目立たないかもしれないが、私にはそれが『トラース・ブレイカー』の奴だってことがすぐに分かった。

「あの人……っ！」

　私だけでなく、樹葉ちゃんも気がついたみたい。頭に『？』マークを浮かべているのは、詠ちゃんと木藤、それに目の見えないお姉様だけだ。

　それもそのはず。お姉様と木藤は彼の顔を見たことがないだろうし、そもそも接点が全くない。詠ちゃんはロランを通して間接的に接点があるけど、その時はかなり離れた位置にいるから、姿や顔はちゃんと見ていないから。

　他に適切な名前がないから、あえてこう呼ばせてもらうけど……あそこにいるのは、『闘悟』だ。

「……私が行く」

「レイちゃんっ？」

　飛び出しそうになった樹葉ちゃんを制して、私はそう言う。

　リーダーが抜けるなんて言語道断だとは思うけど、あいつには一言言ってやりたいことがあるのだ。

「ちょっと待ちな――」

「お姉様。許可を」

　木藤の言葉を遮って、私はお姉様に跪いて地面を見つめる。

「……どうしても、やらなくてはならないことがあるのですね？」

「はい」

　そう言うと、お姉様は顎に手を当てて考える素振りをする。

　でも、それも一瞬だった。

「分かりました。いいでしょう」

「……っ！　ありがとうございます！」

　伏せていた顔を勢いよく上げると、少しだけ微笑を携えたお姉様の顔が飛び込んでくる。一体どうしたのだろう、と思っていると、そんな私の気持ちを察したのか、お姉様の方から答えてくれた。

「いえ、ロランは幸せ者だな、と思っただけですよ」

　どうやら、私の考えなどお見通しならしい。

　私はもう一度お礼を言うと、斧槍を手に立ち上がる。そのまま闘悟のところへと向かおうとしたが、

「待ちなさい」

そう言って邪魔する者がいた。

　木藤だ。

　私と闘悟を直線に結ぶルートを塞ぐように立ちはだかり、鋭い目でお姉様と私を交互に睨みつけ、口を開く。

「お姉様。お言葉ですが、今彼女を彼の元に向かわせるのは反対です。……あなたも、今回の任務はお姉様の護衛ですよ？　それを勝手に――」

「木藤。いいのですよ」

　くだくだと文句を垂れる木藤を、お姉様はそう言って止め、言葉を続ける。

「ここにはあなたの他にも、樹葉さんや詠さんもいらっしゃいますし、それに私も多少は戦えます。心配はありません」

「で、ですが……」

「それに、『トラブレ』の方には色々と聞きたいことがありますしね。聞いた話から状況を思い浮かべてみれば、どうやらこちらにいらしたメンバーがいるそうではありませんか。その方を逃がさないためにも、レイさんには向かってもらった方が良いと思いますよ」

「う……」

「……行ってきます」

　話は決まったと見て、私はそう言って木藤の脇を通り過ぎる。瞬間、木藤に少し睨まれた気もしたが、私はそれを無視した。

「樹葉ちん、ごめん」

　走り出す前に、私は樹葉ちゃんに謝る。

　言葉にはしないけど、ロランを傷つけられて一番頭にきているのは、多分彼女だから。

　でも戦場で、感情的になるのは褒められたことでは無い。

　正直私も少し危ないけど、樹葉ちゃんよりは冷静になれている自覚はある。だからこそ、お姉様はわざわざ『レイさんには』と言ったのだし。戦闘には向かない詠ちゃんを向かわせるわけにはいかないから、ここは当然、私が行くべきだ。

　納得しているかどうかは別として、樹葉ちゃんもその点は理解してくれているっぽい。言葉は返してこなかったけど、目で「ごめん、お願いします」って伝えてきた。

　そんな中、私の耳に、心地良いＢＧＭが流れ込んでくる。

　相変わらずいい仕事をするな、と思いながら、私は詠ちゃんにウインク。

「……あ」

　そういえば、と私はつい声を出した。

　ロランは『これ』に気が付いているのだろうか？　いや、きっと気が付いていないんだろうなぁ……今の今まで、何もコメントの一つも無かったし。作った本人も感想が聞きたくてウズウズしていたんだけど、何せ昔のロランにそんな事を聞いても、変な顔をされるのがオチだから、ロランから聞いてくるのをずっと待っている。

いやそれ以前に、ロランは戦いの時は周りの音を全く気にしないところがある。私の指示も耳に入っているんだか……ってくらいのレベルだ。聞こえている様子が無いから、『これ』なんてそもそも気がついていないかも。

……自分で思っておいて難だけれど、そんなことがありえるのかな？　ロランは『トラース』に来る時、必ず真っ赤なカラーコンタクトを付けてくるけど、あれの影響なのだろうか？

「あれ、なんで付けているんだろう？」

　ふと気になって、また私は独りごちる。見た当初は「ヤバい。格好良い」って感じで、何となく心を擽られてしまい、まぁただのファッションだろう、なんて特に疑問にも思わなかったのだけど……考えてみれば、ロランがそんな無駄なところに力を入れるはずが無い。

　無事に任務が終わったら、聞いてみよう。今のロランなら、普通に答えてくれるかもしれない。

　でもその前に、『これ』についての反応を見るのが先かな？　どんな反応をするのか……想像すると、ちょっと可笑しくて、自然と自分の口角が上がるのが分かった。

　おっと……集中集中！

「さて、いっちょ行きますか！」

　そう叫んで、私は斧槍を片手に地面を蹴った。

　後ろに流れていく景色の中、敵との距離がグッと近くなっていく。でも、今の私の目的は彼らじゃない。後ろから空気を切り裂くような音がしたかと思えば、一本の矢が先頭を走る敵の足元へと飛んでいく。地面に突き刺さったかと思うと、刹那、大量の白い煙が辺り一帯に広がった。樹葉ちゃんの攻撃だ。

　弓矢というのは遠距離武器だけど、樹葉ちゃんはそれを、どちらかといえば私とロランの戦闘の補助を目的とした使い方をしてくれる。まあ、多分ロランは気がついてなさそうだけどね。

　小声で一言「ありがとう」と呟いて、私は目的の男の元へと向かう。

　斧槍を掲げると、『闘悟』も私が向かってくることに気がついたようで、拳を構えた。

　少し驚いた様子の『闘悟』だったけど、同時に自分の元に私が来ることは予想していたみたいな、微妙な顔をしていた。

　限界ギリギリのスピードで走っていたと思っていたけど、どうやら私はさらに速度を上げていたみたい。上り坂を一気に駆け上って、あっという間に彼との距離を詰めた。

「うりゃあぁぁぁっ！」

　気合を込めて飛び上がり、私は頭上に振り上げた斧槍を垂直に振り下ろす。でも――

「――っ？」

　ガキンという金属音を響かせて、『闘悟』は私の一撃をカイザーナックルで受け止めた。とは言えこいつも無事では無いようで、痛みからなのか顔を顰める。

「いっ……てえな、こん畜生っ！」

「そりゃどうも。これでも割と鍛えている方なんで……ねっ！」

　今度は時計回りに一発振り回す。受け止めるのは危険だと判断したのか、『闘悟』は後ろに飛び退いてそれを躱した。

　突き、反時計回り、時計回り、上から……それら全てをこいつは受けずに躱していく。

「うりゃっ！」

「……っ！」

「――てっ？」

　が、二度目の突きを放った瞬間、今まで躱すだけだった『闘悟』が急に前に出てきた。私と『闘悟』の距離は、ほとんど密着できるか否かのレベルだ。

　斧槍は槍の一種。中距離には向いているが、接近戦には弱い。その弱点を、ついてきた。

　伸びきった私の腕。そしてその手に握られている斧槍の持ち手を狙って『闘悟』は拳で弾き、さらに私にボディブローを決めようと腕を引く。

　しかし――

「――おっと！」

「なにっ？」

　私だって、何も対策をしていない訳じゃ無い。斧槍を弾き返してきた時の力を利用し、私は斧槍の先端を地面に突き刺し、そこを軸に体を持ち上げる。

　要は『逆上がり』の要領だ。きっと『闘悟』の目には、私が消えたように映ったことだろう。まあ、三回に一回くらいしか成功しないけど。

「むむむっ？」

　本当はこれで『闘悟』の背後を取る予定だったんだけど、今日の私はかなりツイているみたい。丁度『闘悟』の頭上に来ることができた。

　これなら……っ！

「滅多に見せられない、レイちゃんの大技ぁ！　いっちゃおっかなぁぁぁっ？」

「上……だとっ？」

　ようやく私の姿を捉えたみたいだけど、もう遅い！

　地面に突き刺さった斧槍の先端を土と一緒に巻き上げて、私は落ちる。斧槍を一回転させて、再び先端を、今度は『垂直に』地面に向けて。

　とあるＲＰＧゲームをやった時、『竜騎士』というものを見た。槍を持って空高く飛び上がり、着地と共に敵に大ダメージを与えることを得意としたキャラクターだ。

　私のこの技は、それを実践でも使えるようにしたものなのだ。近くに木とか『飛び上がるための足場』になるようなものがあれば簡単に出来るのだが、こう何も無い場所ではこんな風に行う。実際は……叫んだ通り、『滅多に見せられない』ものなのだけれど。

　まだまだ改善の余地はあるけど、それでも『私の体重』+『斧槍の重量』+『重力』の分を、斧槍の先端に集約させたこの技は、まさに一撃必殺と呼ぶにふさわしい威力を持っている。

　直撃はマズイと感じたのか、『闘悟』は着地地点を離れる。

　それでも、すぐさまカウンター出来るような位置で拳を上げたけど、甘い。

　斧槍が着地した瞬間、『闘悟』が踏み込んでくる。でも同時に……

　土が、爆ぜた。

一般的に『トラース』の土は、地球のものと比べると硬くて脆く、そして空気を外に漏らしにくくなっている。だから、こんな風に真上から強い衝撃を与えてやると――

「――っ！」

　まるで地雷でも踏んだかのように、激しく土が盛り上がるのである。

　火薬とかは全く使っていないが、最早『爆発』と言っても過言じゃ無い。

　爆風の如く襲ってくる土の欠片の中を進むことは流石の『闘悟』も出来なかったのか、衝撃に身を任せて大きく後ろに吹っ飛んだ。背中から地面に落ちるが、そこは上手く受身をとったようで、すぐに立ち上がる。顔も髪の毛も服も、土埃でひどく汚れていた。

　舞い上がった土に咽せ込みながらも、私は斧槍をブンブン振り回して土煙を払い、茶色くなった視界をクリーンにする。

「……やるね、あんた」

　斧槍の矛先を再び『闘悟』に向けると、『闘悟』はそう呟いた。

「鍛え方だとかテクニックだとかもそうなんだが……それだけじゃなくて、なんつーか、鬼気迫るものがある」

「……まあ、あんたもね」

　純粋に褒められた気がして、何となくこいつへの戦意が薄れてしまい、私はそう返した。

　斧槍を持っている相手に、カイザーナックルがあるとはいえ素手で互角に渡り合ってくるなんて、それこそ一体どんな訓練をしたんだかと聞きたくなる。そう言えば、以前ロランと戦っていた時も、あの刀を相手に同じように素手で相手をしていたっけ？　それで勝ったのだから、大したものだ。一人の『チーム』のメンバーとしては、素直に賞賛に値するものだと思う。

まあ最も、『闘悟』に対する敵意は未だなお健在なんだけども。

「……あいつはどうした？　今日は来ていないのか？」

「『あいつ』……？　ああ、ロランのこと？」

　急にそんな事を聞かれて一瞬キョトンとしたけど、すぐにこいつの言っている意味が分かった私は、そう聞き返す。

「ロランなら、今は謹慎中よ。ここにはいないわ」

『闘悟』が頷いたので、ちょっと考え込んだけども、まあ言ってしまってもいいだろう。

　ただ一言、「そうか」と呟く『闘悟』が、少し寂しそうな顔をしたからちょっと驚いた。

　そのまま私たちは黙り込む。何か聞いたほうがいいのかな、なんて考えたけど、何となく話しかけづらい。かと言って攻撃を仕掛けるような雰囲気でもなく、彼に矛先を向けたままの斧槍は、さっきから宙を遊んでいる始末だ。

　さてどうしよっかなー……なんて考えていると、向こうからこの静寂を破ってきた。

「なあ。あいつは今、幸せか？」

　ただ、出てきた言葉がこんなにも反応に困るものだとは思わなかったけど。

　えー……っと、幸せ？　どうしていきなりこんな事を？　素直に答えてしまっていいのかな？

「わりぃ。へんなことを聞いちまったな」

　答えあぐねている私をどう思ったのか、『闘悟』は困ったように頭を振りながらそう言った。

　そして、自分の右手を顔の高さにまで上げてヒラヒラと振る。でもそんな右手には、人差し指が欠けていて、私は何とも言えない気持ちになる。いくら敵とは言え、あまりいい気分のする光景では無い。

　ましてそれが、

「いや、あいつがもしこれのことを気にしてんのなら、ただ一言「気にすんな」って俺が言っていたってことを伝えてくれ」

「……ごめん」

　自分の仲間が斬ったのであれば尚更だ。ロランも斬りたくて斬ったわけでは無いんだろうけど、それでもリーダーとして、謝らなければならない事だと思った。

　そんな私の謝罪に、彼は首を振る。

「これも戦いだ。仕方ねーよ。斬られた俺が悪い。……ただ『あいつに斬られた』ってのは、ちょっとショックだったけどな」

　最後の方で、少し悲しそうに目を伏せた『闘悟』。

　別に、証拠があるわけじゃ無い。私の勘違いかもしれない。

　でも、

ふと、もしかして彼も私たちと同じなんじゃないかな、という気がした。

そう思うと、急に戦意が無くなってしまい、私の手からも自然と力が抜け落ちてしまう。気が付けば、斧槍の矛先を彼から地面へと落としてしまっていた。

それは『闘悟』も同じだったようで、私の斧槍の矛先が自分から逸れたと同時に、自身のファイティングポーズも解いた。

「今はどうだか分かんねーけどさ。昔はあいつ、間違っても平気で人を傷つけられるような奴じゃなかったんだよ」

　ふと、そんな事を『闘悟』が言い出した。

　私の知らない頃のロラン。『研修所』でのロランの話だろう。

　興味深いってのもあったけど、それ以上に聞かなきゃいけないような話な気がした。

「偶にどっかに行っちまうこともあったけど、基本的によく笑う奴だった」

「……今のロランからは、あんまり想像出来ないね」

　少なくとも、ちょっと前までは私たちの前ではあまり笑わなかったと思う。そりゃ、軽いジョークでクスッと笑うことはあったし、常に仏頂面ってわけでも無かったけど。でも、心の底から笑っているような、そんな幸せそうな笑顔を見せるようになったのは……『ワルキューレ』に入った当時と、そして家出してから戻った後だけだと思う。

「やっぱあいつ、変わっちまったのか……」

　本人は何でもなさそうに言っているつもりかもしれないけど、はっきりと声が震えていた。

　でも……

「多分それは……あんたがロランを……親友を裏切ったからじゃないのっ？」

　もっとオブラートに包んだ言い方があったのかもしれないけど、私は感情のままそう聞いた。はっきり怒気が含んでしまったのは認めるしかない。

「俺が……あいつを……？」

「なに？　自覚が無いっていうのっ？」

　一体何を言っているんだ、というような困惑した表情をする『闘悟』。そんなこいつの表情にムカついて、私はさっきよりも声を荒らげた。

「いや……待ってくれ。どういうことだよ？」

「どうもこうも……あんたが自分の名前を変えたんじゃないっ！　ロランにつけてもらった名前をさ！」

「いや、それこそなんの話だっ？　俺は名前なんて変えてねーぞっ？」

「嘘っ！　だってロラン言ってた！　あんたがどこの『チーム』にいるのか上に聞いたら、『闘悟』なんて名前の奴は、どこの『チーム』にも存在しないって言われたって！」

「はあっ？　そんなわけないての！　『トラース・ブレイカー』だってメンバー名簿の提出義務はあるし……あいつの伝え方が悪かったとか、そんなとこじゃねーのか？」

　困ったような顔でこいつはそんな事を言うけど、そんなはずは無い。

「ちゃんとあんたの名前を紙に書いて聞いたって言ってた！　それとも何？　ロランがあんたの名前を覚え違いをしていた、とでも言うつもりっ？　『闘士』の『闘』に『覚悟』の『悟』で『とうご』、それがあんたの名前でしょっ？」

「あ、ああ……そうだよ。それが俺の名前だ。……だったら、調べた奴が見落としたんじゃね？」

「…………」

　確かに、私は誰がどんなやり方で、こいつの所属している『チーム』を調べたのか知らない。

　すぐに否定出来なかった私に、やれやれといったように首を振る『闘悟』……いや、もう闘悟でいいか。これがあいつの本名みたいだし。

　とは言え、これは一体どういうことなのか……ロランが嘘を言っているとは、私にはとても思えなかった。じゃあ、上の誰かが嘘を言った？　いや、理由が無い。

　あ、いや。そう言えば……

「そうよ……それだけじゃないわ！　あんた、なんで『トラブレ』なんかに所属しているのよっ？　それだって、ロランが……あいつが、どんなにショックを受けたのか、あんた分かっているのっ？」

「…………」

　私が声を荒らげてそう問い詰めると、闘悟は目を伏せる。でも、何も答えない。

　それがますます腹立たしくて、私の斧槍を握る手にも力が入った。

「ロラン言ってた。『あいつが『トラブレ』以外の『チーム』に所属しているのなら、もしかしたら、あいつが名前を変えたのも何か理由があったんじゃないかって思えたかもしれない』って！　どうして……どうしてこの仮想空間を壊そうとする『チーム』なんかに入ったのっ？　あんただって知っていたでしょ？　ロランが――」

「当たり前だ！」

　私の言葉を遮って、黙っていた闘悟は一転、大声を上げる。

「知っていたさ。あいつがここを……『トラース』を誰かのために使おうとしている『チーム』に入りたがっていたことなんて、知らねー訳がねぇだろ！　だって……あいつは俺の親友なんだからな！」

「……っ」

「あいつが今は何て言おうが、何て思おうが、俺はあいつと今でも親友だと思ってる」

「だったら、どうして……どうしてロランのやりたいことの邪魔なんかするのっ？　敵に回ることが、親友のすることなのっ？」

「親友ってのは、馴れ合いじゃねぇんだよ」

　闘悟はそう言うと、大きく息を吸って、再び拳を構える。

　私が斧槍の矛先を再び闘悟に向けたからだ。

「あんた、ロランと同期か？」

　闘悟は構えながらも、突然そんな事を聞いてきた。

「……ええ、そうよ。それがどうかした？」

「なら、覚えてっか？　あの『事件』……俺たちが『研修所』を卒業した時のことをよ」

　私は黙って頷く。その話なら、私もよく知っていた。いや、私だけじゃなくて、樹葉ちゃんや詠ちゃんも知っている。私も含めてそれぞれ、大勢いる当事者の一人だったからだ。

　突如襲ってきた、謎のロボット。正体は『ワルキューレ』に入ってから分かったけど、当時は凄く怖かったのを覚えている。

『ワルキューレ』の人が助けてくれなかったら……きっと私は死んでいただろう。

　……ああ、そっか。

「闘悟、あんた……もしかして？」

「……その事件に、勿論ロランも巻き込まれた。実際に本人に聞いたわけじゃないさ。でも、『研修生番号２４９９６８番が襲われた』って職員の奴らが話しているのを聞いて……俺は、気が気出なかった」

「じゃあ、あんたが『トラブレ』に入ったのって……ここを壊したい理由って……」

　闘悟は、手のひらから血を流すくらい強く拳を握り締める。それだけで、答えは十分だった。

「……どうしてあいつが、ロランがあんな目にあわなけりゃならないんだよ！　あいつ昔、うわ言でこんな事を言ってた。『だれかのために、『トラース』を使える人になりたい』って！　そんなロランが、どうして襲われるっ？　あいつだけじゃなくて、お前らだって、誰も何も悪いことなんてしてないだろうが！

　だから……俺はこの世界をぶっ壊す！　こんな、『トラース』があるせいで、これから先もロランみたいな奴が出るくらいなら、『トラース』なんて無い方がマシなんだ！」

「それが、あんたが『トラース・ブレイカー』に入った理由……

　でも、なんで『ワルキューレ』に騙し討みたいな真似を？」

「……騙し討？　何の話だ？」

　今度も闘悟は、訳が分からないといったように首を傾げる。

「何の話って……知らない訳無いじゃない！　あんた達の方から会談を持ちかけてきたくせに、他の『チーム』に情報を流して――」

「待て、会談？　『ワルキューレ』と？」

　私の言葉を遮って、闘悟は信じられない事を私に伝えた。

「うちにそんな予定はないぞ？」

「はぁっ？」

　私の喉から素っ頓狂な声が出てしまうのも、無理からぬことだろう。

「えっ？　じゃあ何？　『ワルキューレ』が騙されたってこと……？　誰が？　何のために？」

「いや、それを俺に聞かれてもな……少なくとも、俺は知らん」

「あんたが下っ端だから、伝えられていないんじゃないっ？」

「んなわけあるか！　これでも、それなりの地位にいるんだぞ？」

　そんな闘悟の言葉なんて、私の耳にはほとんど届いていない。私の頭の中は、『誰がこの会談を仕組んだのか』ということでいっぱいだった。

　……いや。

　私は、頭を振る。今は、そんな事どうでもいい。大事なのは、今すぐ『トラース』から帰還する事だ。『トラブレ』が会談の提案をしていない以上、ここにいる意味は無い。『誰が、何ののために』なんて考えるのは、無事に帰ってからでも遅くないだろう。

「闘悟。悪いけど、勝負はお預けよ」

　そう言って、私は闘悟に背を向ける。向こうでは、小さな爆発音がいくつも鳴っていた。うちは機械系の武器はほとんど使っていないから、あの爆発は敵のロボットか何かのものだろう。多分、まだ誰も死んではいないはずだ。

本来なら、敵に背を向けるなんてあらゆる面から言語道断なんだけど、少なくとも闘悟は、後ろから不意打ちするような真似はしないだろう。短く会話しただけだけど、そんな卑怯な奴じゃないことは分かったつもりだ。

「……ぶっちゃけさ」

　皆のところへと向かう前に、私は呟く。

「まあ、ロランもロランで悪いところはあったんだろうし、あいつが素直にならないとどうしようも無いことなんだろうけど……その、出来たらロランと仲直りしてくれない？」

「言われなくても、そうするさ。当たり前だろ」

　私の言葉に間髪入れず、闘悟はそう答えた。

　が、

「……どうやらロランは、いい仲間に巡り会えたみたいだな」

　続けた一言が、お姉様と言っている事がほとんど同じで、私は少し驚いた。

「……そりゃ、お互い様じゃない？」

　何となく照れくさくて、私はそう返す。

　どうやら、私が心配するようにはならなさそうだ。後は……ロランを説得するだけかな？

　なんて思っていたのだが、

「わりぃけど、今日話した事は、あいつにゃ言わんでくれ」

　闘悟がそんな事を言うので、私は思わず振り返る。

「……いや、だって。なんか恥ずかしいっつーか……分かるだろ？」

「なんでっ？」と言う前に、闘悟は先手を打ってそう答える。

　まあ、分からなくもない。半ば、喧嘩みたいになっちゃったからね。

　でもこれは……もしかすると、また色々と面倒なことになるかもしんない。全く男の子って面倒くさい……。

　そう思うと、心の中で、密かに溜息を吐かずにはいられなかった。

「……分かったわよ。一応、善処してあげる」

　取り敢えず、この件に関してごちゃごちゃと闘悟と話し合っている時間は無いので、ここらで適当に頷いて、切り上げようとする私。

　でも、もう一度皆の元に向かおうとすると、今度は闘悟が声を掛けてきた。

「なあ、あんた名前は？」

「……レイよ。もう行っていいかしら？」

　仕方なく、私は早口にそう言う。

　私の心情なんてしったこっちゃなさそうに、闘悟の「そうか、教えてくれてサンキュー」という声が聞こえた。なんつー能天気な声……。イライラを通り越して呆れてしまった。こいつはＴＰＯってものを知らないのだろうか。別の機会でもいいだろうに……。

　なんて思っていると、再び闘悟の声が聞こえてくる。

「……ロランのこと、よろしく頼む」

　今度は小さな声で、どこか切なさそうに。

　私は何も言わず、ただ小さく頷いて、今度こそ皆の元へと向かった。

　闘悟と別れて、首尾よく皆と合流した私は、お姉様に今聞いた事を伝える。

　会談が別の『チーム』に仕組まれたものだと知って、少しショックを受けた様子だったけど、そこは流石の『ワルキューレ』のリーダー。的確な指示で、見事にここから逃げることに成功した。

　本来なら私たちの部屋に繋がるゲートで帰る予定だったけど、『ダウンロード・メタル』の近くに敵が集まっていたので、やむを得ず、緊急用の別の『ダウンロード・メタル』へと向かう。こちらに戦う意思が無いと分かったのか、追ってくる敵は然程多くなく、私たちは無事に地球の、私たちが住んでいるマンションの前に戻ってくる。

　そんな中、どこか木藤の奴が眉をひそめたみたいだったけど……さっきの戦いで、何かあったのだろうか？

　本人に聞く勇気は流石に持ち合わせていないので、樹葉ちゃんや詠ちゃんに聞いてみた。けど、特に何かあった訳では無いみたい。強いて言うなら、お姉様への攻撃が少し多かったみたいだけど、『チーム』リーダーへの攻撃が多いのは当たり前だし……木藤があんな顔をする理由にはならない。

　……ああ、いや。

「『トラブレ』からの会談」という話が間違っていたのだ。そりゃあ、そんな顔もするか。情報の裏もきちんと取らなかったことは、明らかに『ワルキューレ』のミスだ。関係部署の対応を見直す必要もある。

　色々大変なんだろうなぁ……と、どこか他人事のようにそう考えつつも、私たちはマンションの中に入る。

「今日は緊急の任務、お疲れ様でした。イレギュラーなことはありましたが、誰一人欠けることなく帰って来れて、正直ホッとしています。今は部屋でゆっくり体を休めて下さい。私たちはマルクスたちと緊急に会議を開かなくてはならないので、今回の件についてのお礼と謝罪は、また後日――」

「い、いえっ。そんな、謝罪だなんて……」

「いえ、そういう訳にも参りませんよ。どういうわけか、このところの任務はあなた方に集中してしまって……これであなた方の健康や学業に支障が出てしまえば、あなた方だけでなく、先代のリーダーにも申し訳が立ちません。ここはどうか、私の顔を立てるという意味でも、受けてはいただけませんか？」

「う……分かりました」

『ワルキューレ』のリーダーとして、そこら辺は気になるらしい。気にする必要なんて全くないんだけどなぁ……まあ、さっき言ったことは半分建前みたいなもので、本心から私たちに申し訳なく思っていることは何となく伝わってしまった。それ気がついてしまえば、私も頷かざるを得ない。

「部屋にある荷物は、後日伺う時に取りにいきます。ではレイさん、樹葉さん、詠さん、今日はお疲れ様でした。ロランにも、よろしく言っておいて下さいね」

『分かりました』

　私たち三人の声が重なる。

「…………」

　お姉様はマルクスお兄様のいる部屋に向かう。木藤だけは何も言わずに、ただ会釈を返して、お姉様の車椅子を押していた。

「……さて、私たちも部屋に行こっか。ロランも心配してるだろうしね」

　お姉様の姿が見えなくなってから、私は樹葉ちゃんと詠ちゃんにそう言う。二人共疲労困憊といった様子で、ただ頷くだけだった。まあ、私が抜けて、たった四人で何十人もの相手をしていたのだから無理も無い。

　それは私も例外じゃなくて、ほとんど闘悟と話していただけなんだけど、かなり疲れてしまっていた。前半の戦闘が効いたのか、それとも慣れない緊急の任務に、自分でも気がつかないくらい気を張ってしまっていたのか……

　とにかく、とても階段を上って部屋まで行く気力なんて微塵も残っていなかった私たちは、珍しく素直にエレベーターを使って五階まで昇る。

　その間、誰も何も喋ることは無く、出てくる音といえば、床を叩く靴の音と、服の布が擦れる音。そして、時折出てしまう欠伸の音だけだ。ロランは夜食でも作っておく、なんて言っていたけど、正直食べられそうもない。このままベッドにダイブしたいくらいだった。あー……でも、その前にお風呂入らなきゃ……

　そんな事を考えつつも、私の頭の中では、もう一つ渦巻いている懸案事項があった。闘悟と話したことだ。この件については、まだ樹葉ちゃんと詠ちゃんにも話していない。あいつは『ロランには言わないで』なんて言っていたけど、誤解したままなのはロランにとっても良くないことだろう。彼には悪いけど、約束を破ってしまった方がいいのだろうか……なんて事を考えているうちに、ようやく部屋の前にたどり着いた。

　エレベーターから部屋までは然程長い道のりじゃないはずなんだけど、ここまで来るのに三十分以上掛かった気分だ。戸の隙間からは、薄らと光が漏れている。どうやらまだロランは起きているらしい。ふと気になって時間を確認すると、まだ十時。まあ、中学生ならまだ起きている時間だよね。

「ただいまぁ……」

「遅くなってすみません……」

　私と詠ちゃんが、まさに蚊の鳴くような声でそう言いながら玄関を跨ぐ。後ろから、疲れすぎて声も出ないのか、樹葉ちゃんもノソノソとついてきた。たまに頭が重力に負けてガクッと下がるところを見ると、歩きながら寝かけていたらしい。そういえば、一番静かだったっけ？

　危なっかしいので私と詠ちゃんが肩を貸す。樹葉ちゃんが小声で『ありがとう』と言うのが聞こえて、まだ辛うじて意識はあるんだなぁ、なんて思ってしまった。こりゃ、樹葉ちゃんはさっさと寝かしてしまった方が……

「……ロラン？」

　その時、詠ちゃんのか細い声が私の鼓膜を叩く。ちらりと詠ちゃんを見て、その視線の先に自分の視線をずらすと……

「……ロランっ？」

　私が声を出せずにいる中、さっきまでウトウトしていたはずの樹葉ちゃんが、今日一番大きな声を出した。

　私たちの腕を離れて、樹葉ちゃんが走り出す。詠ちゃんも『待って下さい！』なんて言いながら後に続く。

　私は、ただ見ているだけしか出来なかった。だって……

　ロランが倒れていたのだから。